

審査の結果の要旨

氏名 星野靖二

星野靖二氏の「近代日本における宗教概念の展開——宗教者の自己理解を中心に」は、近代化の道を歩み始めた日本で、**religion** の訳語として用いられた「宗教」の概念がどのような意義をもって用いられ、精神文化をめぐる同時代の思考枠組みと関わり合っていたかを論じたものである。西洋から持ち込まれた宗教概念があたかも普遍的な概念であるかのように思われていた時代が過ぎゆきつつある今日、日本の宗教の現実と照らし合わされながら宗教概念がいつ頃どのように定着し、その後どのような使われ方をしてきたかという論題は大いに注目を浴びつつある。星野氏はこうした新しい研究動向を踏まえるとともに、長い蓄積をもつ近代思想史研究の成果を批判的に読み込みつつ、キリスト教や仏教を奉じる明治初中期の論者に即して宗教概念の意義内容の変化を明らかにしていく。

初期のキリスト教は「文明」や「開化」に貢献するものとして意義づけられることが多く、それはまた、自然神学的なキリスト教理解にそったもので学問と宗教が合致するという前提に立っていた。そこには儒教の影響を受けた伝統的な世界観と符節を合わせていたという事情も反映している。このような宗教理解が支配的であった明治10年代には、他宗教の存在を意識しつつ、自己が信奉するものを相対化して「宗教」として提示する論述の形式も広まっていく。星野氏は中村敬宇、高橋吾良らのキリスト教系の論者、また「仏教演説」という論述形式の登場に注目しながら、定着期にあった宗教概念が以上のような特徴をもっていたことを丁寧に示していく。

続いて、単に「文明」や「開化」に役立つものとしてではなく、道徳や知と関連づけられつつ「宗教」独自の領域があると強調される時期が来る。キリスト教の小崎弘道や仏教の中西牛郎の場合を見ると、「開化」に役立つとしてもそれは宗教が道徳や知を超えていてそれらを基礎づけるようなものだからだと解されている。明治20年代に移るにつれて、植村正久においても「文明」という目標とは別に「宗教」独自の領域があることが強調され始める。このような立場は内村鑑三不敬事件と「宗教と教育との衝突」論争を経て多数の人びとにおいて明確に析出されてくる。以上は、宗教学の成立と密接にからみあう過程だが、さらに宗教学成立後の明治後期になると宗教学的な知を前提にしつつ自らの宗教の内側での知的な掘り下げに集中するような態度が目立つようになる。

以上の論述は丁寧な資料の読み込みから引き出された星野氏独自の理解であり、近代初期の日本における「宗教」概念の歴史についての大きな貢献である。従来の宗教思想史で取り上げられてきた宗教と国家の関係といった問題について、またなぜこれらの素材が取り上げられたのかについての論及が弱いなど不十分な点はあるが、キリスト教、仏教の思想史や宗教学史を横断し、数十年の幅で日本の「宗教」概念の歴史をたどった試みはこれまでになく、新しい肥沃な土地を切り開くような価値をもつ業績と言える。よって審査委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与するに値するものと判断する。